



Title	全校生徒集団を対象とした講演会形式のエイズ教育の検討 - 高等学校における性・エイズ特設授業の実践から -
Author(s)	金城, 昇; 我如古, 直哉; 新垣, 美央; 上原, 直子; 後呂, 健二; 嘉陽, 宗芳; 野原, 賢一; 金, 福柱
Citation	琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要(11): 35-44
Issue Date	2004-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5727
Rights	

全校生徒集団を対象とした講演会形式のエイズ教育の検討

—高等学校における性・エイズ特設授業の実践から—

金城 昇* 我如古直哉 ** 新垣美央*** 上原直子***
後呂健二**** 嘉陽宗芳**** 野原賢一**** 金 福柱****

Examination of a Lecture on AIDS for a Large Number of Students in a High School

KINJO Noboru, GANEKO Naoya, ARAKAKI Mio, UEHARA Naoko,
USHIRO Kenji, KAYOH Muneyosi, NOHARA Kenichi, KIN Fukutyu

県内では12月1日のエイズデーに因んだ特設授業の取り組みは多いものの、エイズ教育の充実という視点からの検討はあまりなされてこなかったように思われる。確かに何百名規模の全校児童生徒集団を対象にすることを考えるとその内容構成や展開方法からしてその効果に限界を感じざるをえないのが実情である。しかし、これだけ毎年実施されることからすると、このことを肯定的に捉えて新しい発展方向を検討することは意義あることだと考える。

今回県立糸満高等学校生約1300名を対象にした性・エイズ特設授業を実践する機会を得たので、従来のエイズ教育の内容や方法の分析をもとに、行動変容をも視野に入れた特設授業のあり方について検討を加えた実践を試みたので報告する。

尚、本実践報告は本学大学院教育学研究科保健体育専修の科目である「保健体育科教育特論演習Ⅱ」及び「保健体育科授業開発・同授業研究」の一環として実施したものである。

1. はじめに

わが国におけるHIV流行は拡大するとともに、2001年10代～20代の若年層の報告数が急増し憂慮すべき事態にある。県内のエイズ患者・HIV感染者数も増加の傾向にあり、九州でも上位に位置しその対策が急務となっている。

しかしながらわが国におけるリスク行動の現状は、高校3年生の性交経験率の割合が2002年には女子45.6%、男子37.3%となっている状況

の中（東京都2002）、1990年代半ばから10代及び20代前半の妊娠中絶率は全県例外なく急速に増加し、さらにはクラミジア、淋菌感染などといった性感染症は同じ時期から同じペースで増加しているのに比べ、逆にコンドームの売れ行きは低下しており、無防備な性行動が急速に拡大していることが言われている。この若者の性行動の特徴を木原（2003a）は、“活発化・ネットワーク化・無防備化”と表現し、さらに木原（2003b）は、「性感染症の流行の後には、HIV

*琉球大学教育学部 **沖縄市役所福祉部市民健康課 ***沖縄県立糸満高等学校 ****琉球大学大学院教育学研究科

の流行がやってくることになる」とし、「世界的HIV流行という海に浮かぶ日本丸は、流行を避けるように進んでいるのではなく、いわば流行という滝壺に向かって進むという逆説的狀態にある」と述べ“日本のパラドクス”と表現するに至る状況にあるとしている。

1990年代初頭エイズ教育の実践が大々的に叫ばれ、県内でも多くの学校で実践され、いかにも定着したかのような感があった。しかし多くの努力にもかかわらず、現在実際にはそのような現状にはなく、むしろエイズに対する関心が少しも浸透しないまま、エイズ教育も普及・拡大できなかったのが事実であったように思われる。さらに、マスコミを含め、県民（国民）、惹いては父母をはじめ学校関係者のエイズ問題、性問題への関心が薄くなっているのが現状のように思われる。

木原（2003b）は、HIV流行へと向かう日本の矛盾した現象の原因を、第一に社会的関心の低下、第二にポルノメディアや性産業の増殖、そして、第三に学校がその役割を十分に果たしていないことの3つをあげている。日本のパラドクスの中、“活発化・ネットワーク化・無防備化”に表現される危機意識の欠如は、何も若者に限った事ではなく、若者の現実との接点が養護教諭など一部に留まり、性教育の担当者や管理職、教師や父母に若者の現実が認識されにくい構造の中で、「寝た子をさますな」論が未だに根強く、むしろ若者と大人との性規範の大きなギャップの存在（高校生のセックス認容率男子68%、女子56%、教師・父母のそれは5%以下であった）は、エイズ教育への無関心をも招いている。

一方、これまでのエイズ教育の内容についてみた場合、その中心は「エイズに関する知識」と「差別・偏見・共生」で構成されてきた。上述のようなリスク行動及び感染予防と差別・偏見の排除及び共生意識の形成の中核に「正しい知識の獲得」が位置づけられてきた。

しかしながら、携帯電話やパソコン等のメールを媒体にした出会い系による事件が社会問題化し、私たちのメタコミュニケーション能力の

低下や「関係できない症候群」（正高、2003）がいわれている状況の中で、対人関係能力の形成を媒介することなく、HIV／エイズに関する正しい知識のみで差別偏見や共生の問題がはたして解決されるのか疑問が残るところである。川端（1996）も言うように、わが国で行われているHIV／エイズ教育において最も欠けているのは、健康な人間関係を形成するのに必要なスキルのトレーニングである。エイズ教育における差別偏見や共生に関わるプログラム内容において、そのようなコミュニケーション能力・対人関係能力の形成という視点は極めて弱いように思われるし、県内におけるそのような内容を含めた実践報告は見あたらない。

このような中でも県内では毎年12月1日のエイズデーに因んで「性・エイズ」特設授業としてエイズ教育が多くの小・中・高等学校で実施されてきた。エイズ教育が日常的に実践されているか疑問視される中、これまでの特設授業の実施は、その実践効果の限界はあったにせよ、エイズに関する知識の定着と浸透に貢献してきたものと考えられる。

しかしながら、この特設授業が何百名規模の集団を対象とするため、その多くが「講演会形式の一方通行型」「教授型」「説教型」となっており、行動変容の面からの効果が疑問視されるだけでなく、生徒集団からの評価も低く、また学校関係者側にさえもあきらめ感があるように思われる。

全校生徒集団を対象に実施する講演会形式の限界を認めつつも、現に県内でも最も多い実践方法である公演会形式の特設授業のあり方を発展的に検討していくことは意義あるものと考えられる。

そこで本稿では、これまでのエイズ教育に欠けていると考えられるコミュニケーションスキルを中心とした内容を、特設授業においてどこまで追求することが可能かを明らかにすること、及びその限界を踏まえ、その後のコミュニケーションスキル形成とエイズ教育の発展的展開を考えるための材料を得ることを目的とした。

2. 実践研究方法

1) 実践対象

沖縄県立糸満高等学校（宮城明校長）が主催した性・エイズ特設授業における1学年から3学年男女1300人を対象に実施した。

2) 実践時期

実践は2003年11月26日（水）、5・6校時に実施した。

3) 実践研究の方法

まず、糸満高等学校の実施したアンケート調査結果とこれまでのエイズ教育の内容分析をもとに、今回のプログラムを作成した。特に、わが国におけるエイズ教育に不足しているとされるスキルトレーニングを中核にしたプログラムで、1000人規模の集団でも実践可能かどうかについて試みた。

4) 実践結果の分析

- ① 事前アンケート調査の結果
- ② 事後アンケート調査の結果
- ③ アンケートの自由記述の意見
- ④ ロールプレイワークシートの記述などを用いて分析した。

3. 実践結果の分析及び考察

1) 講演会形式（特設授業）エイズ教育の考え方

本稿で検討したいのは学校における全校児

童・生徒集団を対象にした講演会形式のエイズ教育における内容と方法である。特に今回はスキルトレーニングが可能かどうか最大の関心であった。

たとえ全校集団を対象にしたエイズ教育（特設授業）であろうとも、エイズ教育として扱わなければならない内容を最低限含める必要があると考える。その教育プログラム構築に参考になるのがJKYBのHIV/エイズ予防関連行動変容モデルである（図1）。この行動変容モデルの特徴は、先行因子・促進因子・強化因子の3要因で構造的にプログラム内容を構成していることにある。このモデルをプログラム構築の基本に据えながら、プログラム内容として以下が、それぞれの要因として考えられる。

【先行因子（前提要因）】

○エイズに関する知識

○危機意識の欠如に関すること

「セックスパートナーの少ない相手でもHIVに感染している人の増加（県内）」

「生殖行為ではうつらない（信頼できる人間どうし、お互いが望んで性行為をする：田能村, 2002）」

○性やエイズに対する偏見・差別意識→共生

【促進因子（実現要因）】

○エイズ・性関連情報の分析

○マスコミの分析

「マスコミが偏見とか差別をエイズに一番

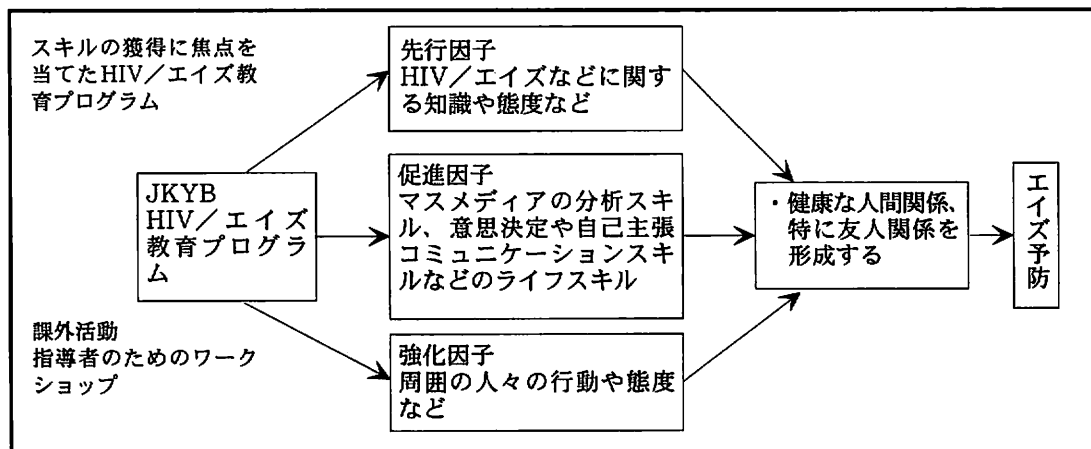


図1 JKYBのHIV/エイズ予防関連行動変容モデル（川畑, 1996）

結び付けている (平田・池上, 1993) 」

○意思決定スキル

(性行為に対する・性交行動に対する自分たちの意思決定能力：性感染症の大きな感染の原因だから→子供を生む行為以外でうつる)

○断るスキル

「いやなら「ノー」と言える (アイデンティティー)、自分の気持ち・相手の気持ち (感情) → (強い自己と自己が対人関係を持つ) コミュニケーションスキルへ」

○コンドーム使用スキル (医療機関・医師の協力も含む)

【強化要因】

○教師の考えや行動

○親の考えや行動

「セックス容認率：高校生男子68%・女子56%に対し親・教師で5%以下である。教師より父母の方が性教育に消極的」(木原：2002)

「寝た子を起こすな」論

教師の「ライフスキルとライフスキル形成能力」全校集団を対象にした場合でも上述したように、当然これらの内容を念頭に入れながら構造的にプログラム作成を試みた。

2) 事前アンケート結果 (糸満高等学校による) から

糸満高等学校の実施した特設授業前のアンケートから主な項目について報告する。

まず、性知識や情報源として誰からかについては同級生 (62.0%)、教師 (21.6%)、先輩 (3.8%) であり、何からかでは映画・VTR・TV (38.0%)、漫画 (20.3%)、教科書 (19.9%) となっている。この結果はこれまでの調査結果とほぼ一致するものであった (内山：2003)。

性に関する相談相手としては、同級生 (68.6%)、母親 (9.1%)、先輩 (6.4%) の順であった。教師や医師に関してはそれぞれ0.5%、1.6%であった。

次に、性について最も知りたい項目としては「異性の心 (35.7%)」が最も多く、次い

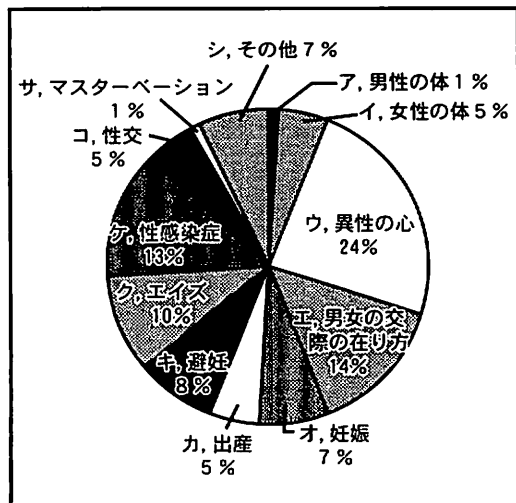


図2 今、性について最も知りたいのは何か (問5)

で「男女交際のあり方 (20.9%)」「性感染症 (19.0%)」「エイズ (14.9%)」「避妊 (11.7%)」「妊娠 (10.8%)」となっていた (図2)。このことから糸満高等学校生の関心は、異性の心やその付き合い方であることがわかる。

性感染症についての認知率では、エイズが84.4%と群を抜いており、エイズ教育の成果が示されている反面、クラミジア (26.6%)、梅毒 (23.6%)、性器ヘルペス (13.5%)、淋病 (11.3%) の認知率となっている。これは平成12年度沖縄市エイズ教育 (性教育) 推進地域事業 (文部省・県教育委員会指定) 研究報告書 (2000) に一致し、同報告書や木原ら (2003) が指摘しているように1990年代半ばから10代でのクラミジアや淋菌感染などが急増している現状から、正確で科学的な性感染症予防教育 (岩室、2003) も重要となっている。

エイズに関する知識の認識率では、その感染源について、蚊 (25.4%)、遺伝 (34.4%)、さらには4.3%と低いもののキスなど誤って認識されている。また、HIV感染とAIDSの発病が同じだとする者 (18.6%) やエイズ治療法の有無のあいまいさ (17.5%) など誤って認識されていることが伺えた。保健所での匿名・無料での検査の認知率は22.5%であった。

表1 エイズの感染源について

ア. お風呂	1.6
イ. プール	1.7
ウ. 同じ食器	1.3
エ. 歯ブラシ・くし	28.8
オ. 洋式トイレ	1.7
カ. バスのつり革	0.1
キ. 握手	0
ク. 汗・涙	1.9
ケ. 話をする	0.2
コ. 蚊	25.4
サ. キス	4.3
シ. 性交	86.8
ス. 遺伝	34.4
セ. 母子感染	75.9
ソ. 一緒に過ごす	0.7
タ. 空気感染	1.7
チ. 注射器の共用	87.2

現行のエイズ教育が「感染者を差別しない」ための人権教育が中心となり、感染リスクを自分のこととして捉えるような教育は残念ながらまだ普及していない」とする指摘もある。そのような中、糸満高等学校では「これからも関係ない」とした者は26.2%であった。日本における今後のエイズ患者・HIV感染者数の動向予想では、非常に増加する(24.7%)、やや増加する(58.3%)となっていた。

3) 今回のプログラム概要

まず、図2に示したように糸満高等学校の生徒が知りたい項目の第一位は「異性の心」であった。この「相手の心」を知るには当然コミュニケーション能力や対人関係能力が必要となる。

一方、エイズ患者・HIV感染者への偏見・差別及び共生の問題の根底に、エイズ/HIVに関する知識の不足によるところがあるものの、真の偏見・差別・共生を考えた場合、これまでのエイズ教育に不足してきたコミュニケーションスキルの形成が重要であることは否めない。

これらのことを踏まえた上で、今回のプログラムでは上記1)の考え方にに基づきコミュ

ニケーションスキルの基礎となるからだを通じたボディー・コミュニケーションワーク(エクササイズ的位置づけ)、セックスは最大のコミュニケーション(生殖性・快楽性・コミュニケーション)及びコミュニケーションスキルとしての「断るスキル(性交行動には、快も不快もある)」の形成を目指したワークで構成した。

その指導方法(すすめ方)としてもできるだけ参加型で展開していくことを心がけた。

4) 事後アンケート結果(糸満高等学校による)から

⑤ 特設授業アンケート結果

特設授業直後のアンケート結果では、第一部生徒会の寸劇を混ぜたクイズ形式によるエイズに関する知識講座について、「とてもよかった(26.7%)」「よかった(43.2%)」で、約70%近くの生徒が好意的評価であった。

その内容である性・エイズについて理解することができたかでは、「よくできた(44.1%)」であったが、「少しできた(53.9%)」がどれくらいの理解度かを分析する必要性が残された値であった。

次に、筆者らの担当した第二部「性行動に対する意思決定やコミュニケーション」の講演についての評価では、「とてもよかった(17.7%)」「よかった(40.7%)」で58.4%の生徒が好意的評価であった。

同様に、その内容への評価として「コミュニケーションを通して相手の気持ちを理解することへの大切さを学ぶことができたか」では、「よくできた27.4%」、「少しできた」が58.7%であった。「できなかった」は12.7%であった。最後に本特設授業の中核的内容であった「断るスキル」の部分への評価では、①「いや」とはっきり言える(28.6%)②相手の気持ちも大事にしたいが断ると思う(33.5%)③自分は断れないタイプだが、ちゃんと断るようにしたい(12.3%)で「断る」としたのは74.4%となった。逆に、相手の気持ちを考えると断る自信がないとしたのは1.2%で、その時にならないとわからないのは

12.4%であった。この結果をそのまま評価することはできないものの、自由記述の結果とあわせると、「エイズを予防するためには、強固な自我意識をもち、自分自身の行動の主体性を確保することが大切であることを理解させる必要がある」といえる。つまり、自分が望まないあるいは避けたい性行為の場合には、きちんとイエス・ノーの言える主体性の確立（田能村、1993.2）に迫りうる可能性が高いことを示した結果とも考えられる。

⑥ 感想（自由記述）から

表2に当日の感想（自由記述）に記された文章から単語単位で抜き出した項目をその単語の出現した人数を数値化して示した（％は総人数で除したもの）。

抜き出された用語はほぼ4つに分類された。まず、特設授業の評価として男子では、「わかった・理解できた（23.4%）」「楽しかった・

面白かった（18.8%）」の順で、次いで「為になった・勉強になった（17.8%）」であった。女子では、「楽しかった・面白かった（27.3%）」「わかった・理解できた（25.7%）」の順で、次いで「為になった・勉強になった（13.2%）」であった。「長かった・疲れた」や「難しい・わからなかった」は男女ともにわずかであった。これらの評価は従来の講演にみられる一方通行的説明型の形態をとらず、生徒が参加できる形態（厳密には参加型ではないが、できるだけ近づけるように努力した）で構成したことが好意的にみられたものと思われた。

一方、内容から生徒が受けとった項目には、わずかではあるが「怖い・なりたくない（男子：2.5%、女子：2.3%）」や沖縄県の感染者数への驚きなどエイズに対して誤解を招くこともありうるということが懸念された。このこと

表2 特設授業後の自由記述による感想

人(%)

項目	男子				女子				
	1年	2年	3年	平均(%)	1年	2年	3年	平均(%)	
特設授業評価	楽しかった・面白かった	31(18.3)	38(24.7)	20(13.5)	18.8	53(27.7)	68(29.4)	49(24.9)	27.3
	良かった	8(4.7)	15(9.7)	12(8.1)	7.5	8(4.2)	17(7.4)	20(10.2)	7.3
	わかった・理解できた	34(20.1)	44(28.6)	32(21.6)	23.4	42(22.0)	70(30.3)	49(24.9)	25.7
	為になった・勉強になった	22(13.0)	32(20.8)	29(19.6)	17.8	19(9.9)	38(16.5)	26(13.2)	13.2
	性のことをきちんと理解したい	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.0	1(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	0.2
	眠らなかった	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.0	1(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	0.2
	まあまあ	3(1.8)	2(1.3)	5(3.4)	2.2	0(0.0)	2(0.9)	2(1.0)	0.6
	長かった・疲れた	4(2.4)	2(1.3)	1(0.7)	1.5	0(0.0)	2(0.9)	1(0.5)	0.5
	難しい・わからなかった	1(0.6)	6(3.9)	4(2.7)	2.4	0(0.0)	13(5.6)	4(2.7)	2.8
誤解	怖い・なりたくない	4(2.4)	7(4.5)	1(0.7)	2.5	0(0.0)	9(3.9)	6(3.0)	2.3
	沖縄の感染者数(驚き・知らない)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.0	3(1.6)	7(3.0)	7(3.6)	2.7
性エイズ	コンドーム	6(3.6)	2(1.3)	4(2.7)	2.5	2(1.0)	0(0.0)	2(1.0)	0.7
	性は大切	2(1.2)	3(1.9)	2(1.4)	1.5	0(0.0)	4(1.7)	1(0.5)	0.7
	考えて行動	3(1.8)	2(1.3)	1(0.7)	1.3	3(1.6)	0(0.0)	1(0.5)	0.7
	将来に生かしたい	0(0.0)	4(2.6)	2(1.4)	1.3	1(0.5)	2(0.9)	5(2.5)	1.3
	差別・偏見	4(2.4)	0(0.0)	0(0.0)	0.8	1(0.5)	2(0.9)	2(1.0)	0.8
相互理解とコミュニケーション	自分も気をつける	3(1.8)	0(0.0)	1(0.7)	0.8	3(1.6)	5(2.2)	3(1.5)	1.8
	自分を大切に	0(0.0)	2(1.3)	3(2.0)	1.1	3(1.6)	6(2.6)	5(2.5)	2.2
	意思を伝える	1(0.6)	0(0.0)	2(1.4)	0.7	1(0.5)	2(0.9)	9(4.6)	2.0
	言葉は大事	0(0.0)	1(0.6)	0(0.0)	0.2	1(0.5)	0(0.0)	0(0.0)	0.2
	相手の気持ちを大切に	3(1.8)	4(2.6)	2(1.4)	1.9	6(3.1)	3(1.3)	8(4.1)	2.8
	相手を大事に	1(0.6)	2(1.3)	1(0.7)	0.9	0(0.0)	2(0.9)	8(4.1)	1.7
	自己決定(意思決定)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.7)	0.2	0(0.0)	1(0.4)	1(0.5)	0.3
	相手を選ぶ	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.0	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0.0
	きちっと断る(スキル)	6(3.6)	2(1.3)	8(5.4)	3.4	10(5.2)	15(6.5)	25(12.7)	8.1
	コミュニケーションスキル	3(1.8)	2(1.3)	7(4.7)	2.6	13(6.8)	20(8.7)	29(14.7)	10.1
	目の働き	0(0.0)	0(0.0)	3(2.0)	0.7	1(0.5)	3(1.3)	2(1.0)	0.9

はくしくも田能村 (1993. 2) の述べた「エイズを予防しようとする意識を育てるためには、ある程度エイズを怖い病気であることを知らせなければならないが、このことを強調すれば、HIV感染者やエイズ患者に対する差別意識を育てることにもなる。また、単純にエイズは怖くないと知らせれば、それを予防しようとする意識は養われない」としたエイズ教育の難しさを示しているのかも知れない。

その他重要な項目として僅かではあったものの性・エイズへの態度や行動に関すること、さらには今回のねらいの中核でもあった相互理解やコミュニケーションに関わる内容がみられたことは評価に値するであろう。特に女子では、きちっと断るスキル (8.1%) やコミュニケーションスキル (10.1%) で高い値を示した。これらの結果を支持する意見は次の「断る」スキルのワークシートの記述分析からも伺われた。

⑦ 特設授業への評価—少数意見から

少数ながら今回の特設授業に対して、今後大いに参考になるいろいろな意見も出された。以下に列挙する。

【1 学年】

「今日の日を忘れずに」「もっと理解したい・もっと学びたい」「すごかった」「退屈しない」などの意見がでた反面、『グロイ内容、もう少しきれいにできないか?』という率直な意見も出された。

【2 学年】

「うけなかった・まじめにやれ (4人)」「スカートだからできなかった」「男と女で恥ずかしい」「少数ならうまくいった」「早口で声が小さかった」

「エイズのことでないような気がした・中途半端」「変なスポーツも楽しかった」

「いつもと違ったフォーラム (3人)」

「グロイ、セックスの連呼でいいのかわからない (2人)」「怖いからわかりたくない」「沖縄の感染者少ない」

「自分に関係ないではダメ・自分のことは

自分で守る」

【3 学年】

「つまらん・あほらしい」「2時間はやらないでほしい」

『面白・おかしくしないで欲しい』『根本的にエイズの何を知っているのだろうか?これでいいのかわからない?』

「大半の人がエイズを知っているから大丈夫だ」

『エイズについて話しているとは思えなかった』

「エイズは毎年する必要はない→日頃からやった方がいい」

『HIV感染とAIDSの違いがわからない』『エイズになるとどのような症状がでるか?』

『好きでもやるなって言っているのかわからない?』『性交はやらない方がいい』『高校生はダメか』『セックスはいいもんだ』

「こころとからだは関係ある」「エイズと性病の怖さをとコミュニケーションのとり方を学べてよかった」

などであった。

これらの少数意見には、ワークシートにおける「セックス」という言葉への「グロイもう少しきれいにできないか・セックスの連呼でいいのかわからない?」やコミュニケーションスキルの形成活動に対する「エイズのことでないような気がした・中途半端」「エイズについて話しているとは思えなかった」など厳しい指摘もあった。また、「怖いからわかりたくない」といった恐怖感を抱かせた部分や「好きでもやるなということか」「性交はやらない方がいい」「高校生はダメか」など田能村 (2002) が指摘するエイズ教育の難しさの問題も伺えた。いずれにしても今回のプログラム内容展開の不十分さや今後修正すべきポイントを指摘するものであった。

5) ロールプレイ「断る」を分析する

① ロールプレイの回答率

表3はロールプレイのワークシートへの記入状況から「断るスキル」形成活動への参加状況のある程度予想することができる。表は

表3 ロールプレイワークシートの無回答率

	ロールプレイ①		ロールプレイ②		
	(人数)	人	%	人	%
男子	1年(181)	30	16.6	42	23.2
	2年(170)	48	28.2	63	37.1
	3年(164)	41	25	51	31.1
	合計(平均)	119	23.3	156	30.5
女子	1年(203)	30	14.8	59	29.1
	2年(238)	65	27.3	94	39.5
	3年(214)	36	16.8	66	30.8
	合計(平均)	131	19.6	219	33.1

シートが無記入であった生徒の数と学年総数に占める割合(%)である。体育館で1300人がひしめき、さらにはワーク時間が短いという条件の中で約70%の生徒がロールプレイのシナリオを作成していたことになる。かなり高い値ではないかと考える。

② 断り方(コミュニケーションスキルの関係)

表4にロールプレイ①(「好きならセックスするのは当たり前だろう」と誘われる場面)において生徒たちが考えたシナリオの好きな人から誘われたときの「断る」場合に使用する主な用語を抜き出し、その出現頻度を数値化してその割合を示した。(NO) から(YES)へ回答が近づくよう9個のカテゴリーに分けて示した。

表からわかるように、当然の傾向かも知れないが、特徴として男子より女子において、学年では3年生より1年生に「断る」傾向が伺えた。男子では特に、「安全であれば」「コンドームがあれば」断らないとした者が多い

傾向にあった。また、より男女ともに高学年になるにつれ「躊躇したり」「わかりあえたら・心の準備ができてから」などより身近な問題として受け止めている傾向が伺えた。1年生では「まだ早い」「まだ高校生だろ」など早い・若いを理由にする傾向にあった。

表5はロールプレイ①、ロールプレイ②それぞれの場面のシナリオに使用された言葉(用語)の出現個数を示したものである。シナリオ①の場面では、「好きなら当たり前だろう」の誘いに対して、男子では「ダメだ(62個)」「早い・若い・まだ高校生(50個)」「イヤ・嫌・ヤダ(46個)」の順で「ごめん(14個)」が4位にあった。女子では「イヤ・嫌・ヤダ(100個)」「ダメ・だめ(74個)」「早い・若い・まだ高校生(65個)」「ごめん(29個)」であったが、男子と違い「当たり前なの?(45個)」と疑問を投げかける用語の頻度が高かった。

シナリオ場面②では男女ともに「愛している・好き」の頻度が高く、男子で60個、女子で163個であった。次は男女とも「早い・若い・高校生」でそれぞれ29個、38個であった。女子において用語の種類や頻度が多い傾向にあった。

6) まとめ-考察にかえて

通常のエイズの授業でも知識教授型からの脱却が求められている。これは講演会形式の全校生徒集団を対象にした特設授業においても同様であり、参加型の集団指導形態が望まれている。

今回1300人を対象に実施した性・エイズ特

表4 ロールプレイ①における「断る」シナリオの内容分析 (%)

	3男子	2男子	1男子	平均	3女子	2女子	1女子	平均
1ふざけんな	3.7	5.3	2.8	3.9	3.7	5.9	0	3.2
2いや・駄目・ごめん	31.1	35.9	41.4	36.1	49.1	39.9	53.2	47.4
3知識・二人の気持ち	2.4	2.9	1.7	2.3	3.3	5.0	5.9	4.7
4まだ早い・高校生だろ	9.1	5.9	18.8	11.3	10.3	11.3	20.7	14.1
5当たり前なの・躊躇	9.8	7.1	4.4	7.1	11.7	5.5	2.5	6.5
6心の準備・分かり合ってから	2.4	2.4	2.8	2.5	0.5	1.3	1.0	0.9
7その時次第・また今度ね	2.4	0.0	0.0	0.8	0.5	1.3	0.5	0.7
8安全・コンドーム	5.5	6.5	3.9	5.3	1.4	0.0	1.0	0.8
9 yes	5.5	4.1	6.1	5.2	1.4	2.1	0.0	1.2

設授業における生徒のアンケート結果やその自由記述の分析からは、実践者らが実践直後に反省したよりも、むしろ、いくつかの厳しい批評とともに好意的な評価が得られた。また、生徒の多くがこれまでの一方通行的な講演会形式の特設授業には飽き飽きしており変革を求めていることも伝わってきた。

今回内容構成として意図的にエクササイズ(からだを通したコミュニケーション活動)を多くしたが、人数の多さの問題、女性徒の服装(スカート)の問題等はあったものの、間の取り方や声の大きさなど臨機応変に対応できるのであれば、生徒の意見からは全校生徒集団を対象にした特設授業であっても参加型の授業を作り出すことが可能であることが示唆された。

さらに、ワークシートを用いたロールプレイにおけるシナリオ作りへの参加率(回答状況)とロールプレイの活動を通して、「断る」スキルの獲得にも近づけることが可能であることが示唆された。

したがって、今回の実践は、学校関係者の捉え方が変わることによって、特設授業のあり方を単なる講演会形式の説教型で終わることなく、参加型(本来言われるところの参加型は企画から運営さらには決定までを含む)の特設授業を、人間関係能力やコミュニケーション能力の形成をも目指したものに職員と

ともに生徒自らが作りあげていく(ボトムアップ)ことが期待される。

同時に、エイズ教育は、養護教諭や保健体育教諭のみが特別に行う教育ではなく、特別活動・道徳や学級活動を通して全校職員が関わっていくべき教育課題である。このことと特設授業とが連結したとき今回試みたコミュニケーションスキルの形成という目標が真に達成されるであろう。

4. おわりに

今回の実践では、生徒たちにとって変な講演会、もしくはこんなのが講演会なのとして受け取られたかも知れない。しかし、従来の特設授業の実施形態はその変革が望まれているのが実情であろうと思われる。今回戸惑いを感じながら協力いただいた糸満高等学校全校生徒及び生徒会の皆さんに感謝するとともに、宮城明校長先生はじめ全職員のご協力に感謝します。

文献

内山 絢子(2003)：性情報源の変化と援助交際、健康教室、2月増刊 東山書房

沖縄県立美里高等学校編(2000)：「学校・家庭・地域におけるエイズ教育(小学教育)のすすめ方」
高等学校におけるエイズ教育(小学

表4 ロールプレイシナリオにおいて使用された用語(個数)

1年		2年		3年		合計		ロール プレイ①	ロール プレイ②	合計		3年		2年		1年	
女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子			男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
25	25	20	23	29	14	74	62	ダメ・だめ	ダメ・だめ	16	24	2	12	8	7	6	5
26	19	32	14	42	13	100	46	嫌・イヤ・ヤダ	イヤ	9	13	4	6	3	1	2	6
31	31	18	7	16	12	65	50	早い・若い・高校生	早い・若い・高校生	29	38	5	3	8	13	16	22
20	4	6	6	3	4	29	14	ごめん	ごめん	4	12	1	1	1	1	2	10
0	0	0	7	12	2	12	9	心の準備	愛してる・好き	60	163	22	63	6	37	32	63
11	2	12	1	22	4	45	7	当たり前	別に	6	4	3	3	2	1	1	0
0	0	5	3	5	0	10	3	考え	考え	4	10	2	5	1	3	1	2
2	3	2	2	2	2	6	7	気持ち	気持ち	1	15	1	4	0	5	0	6
0	0	0	0	3	0	3	0	間違っている	違う	7	24	3	7	1	13	3	4
1	3	5	0	6	0	12	3	セックス	セックス	4	9	2	2	2	4	0	3
0	1	1	0	1	0	2	1	そう思わない	関係ない	5	11	1	7	1	4	3	0
0	0	0	0	1	0	1	0	妊娠	お互い	1	5	0	2	1	2	0	1
0	0	0	1	1	0	1	1	興味	別れ	0	5	0	2	0	1	0	2
0	1	0	2	1	1	1	4	気分	責任	1	5	0	3	1	2	0	0
0	0	0	0	0	3	0	3	性病	問題	2	18	0	10	1	3	1	5
0	0	0	1	0	1	0	2	愛	愛	101	153	32	61	25	39	44	53

教育)の指導の研究>、沖縄市エイズ教育(性教育)推進地域事業研究報告書

木原正博他(2001):平成12・13年度厚生労働省HIV社会疫学研究班報告書

木原雅子他(2003a):日本の若者の性意識・性行動の現状、健康教室、2月増刊、東山書房

木原正博他(2003b):エイズの今後、健康教室、2月増刊、東山書房

田能村祐麒(1993):「エイズ予防教育」で何が必要か、体育科教育別冊「エイズと教育」、大修館

田能村祐麒(2002):「エイズ教育の内容・方法の改善」エイズシンポジウム中央研修会基調講演

正高信男(2003):ケータイを持ったサル「人間らしさ」の破壊、中公新書